

江戸の天気

太田記念美術館(原宿) 2021.06.26~07.25(前期) 07.30~08.29(後期)



「浮世絵」には様々な気象現象が描き込まれていて、晴れわたる空、土砂降りの雨、しんしんと降る雪、雨あがりの虹、刻々と変わる天気を浮世絵師たちは繊細な色彩の変化によって、あるいは大胆に変形させて表現してきた。

本展では、絵画の中の天気に注目し、「葛飾北斎」「歌川広重」「小林清親」らによって生み出された風景画を紹介し、浮世絵師たちの個性溢れる表現を通して、うつろう空模様を愛でる日本人の美意識はもちろん、時には風雨に翻弄されながらも繰り広げられた「空模様の表現」の妙技を読み直している。



歌川広重 《東海道五十三次之内 庄野白雨》

にわか雨に打たれながら、山道を慌てて抜けるかごかきや傘を手にした旅人も先を急いでいる。単純な構図であるが背後の竹藪のざわめきも伝わる。

葛飾北斎 《富嶽三十六景 駿州江尻》 1830~33年頃

「江尻」とは、川(江)の尻、すなわち巴川下流の砂州にできた宿駅で、作品は、吹き飛ばされる懐紙や人々の姿勢で、風が備える空気の色感を目に見える形にして、対角線が生かされている構図となっている。大きく蛇行する土手道に突風が吹き起った一瞬を捉え、木は大きく傾き土埃で空が黒く霞み、着物の裾を押えたり、飛ばされた笠を追いかけたりと皆おおわらわである。



歌川広重 《名所江戸百景 高輪うしまち》 1857年

本作は、すでに上がった雨を描いた作品で、手前に大きな牛車を描きつつ、雨上がりの空にはとても大きな虹がかかっている構図で、雨後の光景であることはもちろん、人影が全くないことで「激しい雨であったかもしれない」ことを思わせる。

遠景には、幕末の風景らしく、海には台場も細かく描写されている。